

わんよう 腕用ポンプ

大正13年（1924）10月新調
岐阜市消防本部蔵

岐阜市東南部・水海道^{みづかいどう}で使用されていた消防用具です。台座に固定されたポンプを火災現場で下ろし、両端をシーソーの様に上下に動かして、その動力によって放水しました。腕用ポンプは、明治3年（1870）にイギリスから輸入され、その後、国産化が進められていきます。

当資料の製造者は、消防ポンプやホースなどの各種消防用具を製造・販売していた名古屋市中区古渡町^{ふるわたりちょう}の「横井兼吉商店^{よこいけんきちょうてん}」（大正9年創業）です。同町には、他にも「鈴木鶴吉商店^{すずきつるきち}」・「日本唧筒会社^{そくとう}」・「名古屋唧筒株式会社」などの消防用具製造業者があり、岐阜方面にも製品を出荷していました。令和6年8月3日（土）～9月16日（月・祝）に開催する企画展「火の用心！～岐阜の消防400年のあゆみ～」では、写真の腕用ポンプのほか、瑞穂市に残る鈴木鶴吉商店製の腕用ポンプなどを展示いたします。

企画展

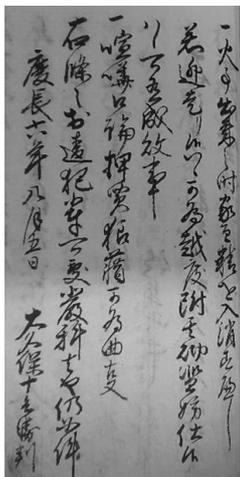
火の用心！ ～岐阜の消防400年のあゆみ～

2024.8.3(土)～9.16(月・祝)

本展は、岐阜市やその周辺に残る江戸時代以降の消防用具や歴史資料を一堂に集め、岐阜の消防史について紹介する展覧会です。本稿では、主要な展示資料とともに岐阜市の消防組織の変遷についてご紹介いたします。

●近世初頭の岐阜と消防

慶長6年(1601)8月、徳川家康家臣の大久保長安は、岐阜町に右のような法度を出しました。その中には、「火事出来之時、家主精を入消すへし、若逃走り候ハ、可為越度、附其砌濫妨仕候ハ、可有成敗事、」という箇条があり、火事が起きた際、家主が精を入れて消すようにといった内容が明記されています。岐阜町に消防組織が成立するのはまだ先のことですが、それ以前の岐阜における消火活動のあり方を伝える貴重な資料です。



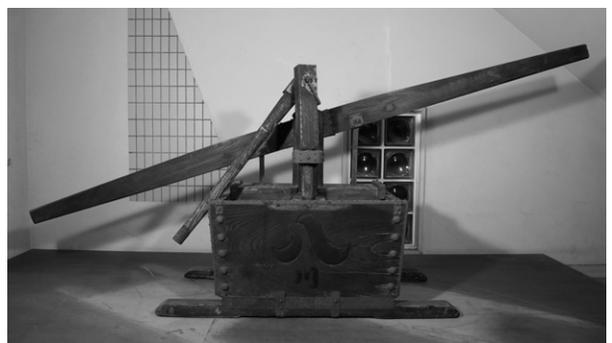
大久保長安法度写(部分)
〔岐阜志略、伊奈波神社蔵〕

●「火消」参上！～近世岐阜の消防～

「火事と喧嘩は江戸の華」という言葉でも有名な江戸の町では、17世紀半ばごろに、「大名火消」・「定火消」などの消防組織が整備されました。一方、岐阜でも、18世紀に入ると、消防組織の活動が資料上で確認できるようになります。現在の岐阜市域で活動した江戸時代の主な火消組をまとめると次表のようになります。

所属・拠点	組名
岐阜町役所抱	丸八組(岐字組)
中川原役所附	尾川組(のちに八川組→小揚組と改称)
岐阜町	一文字組・大文字組・水之手組・竹栄組
古屋敷新田	三豎組
今泉村	巴組
小熊村・忠節村ほか	小之字組
則武村・正木村ほか	の之字組
長良村ほか	蛇之目組
雄総村	雄之字組
御園町	三之字組(美之字組)
上加納村	加之字組(加組)
加納町	いろは組・東組・西組・南組・北組・清水組・角組・鱗組

〔岐阜消防沿革史〕(1939年)・『岐阜市史 通史編近世』(1981年)などをもとに作成

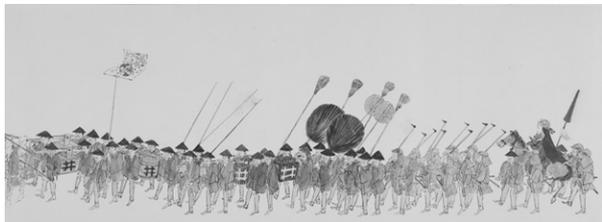


「八川」の組名が入った龍吐水(岐阜市消防本部蔵)



三豎組関係資料(江戸時代、個人蔵)

江戸時代の消防は、現代のような放水による消火ではなく、家屋を破壊して延焼を防ぐ「破壊消防」と呼ばれる方法が主でした。下記資料にも、破壊に用いる「鷹口」や、風を起こして延焼を防ぐ「大団扇」などが描かれています。



かのうほんしゅながい けぎょうれつ まかん
加納藩主永井家行列図巻（部分）
(明治時代、岐阜市歴史博物館蔵)

展示期間：8月27日（火）～9月16日（月・祝）

●私設消防から公設消防へ～近代岐阜の消防～

明治時代になると、廃藩置県によって岐阜町の役所抱火消などが解散し、これに代わって岐阜町では「い・ろ・は・に」の各組（のち「岐組」→「火防組」）、加納町では「よ組」が整備されました。これらは、民費中心の自治的な消防組織であり、「私設消防」などと呼ばれます。



加納町「よ組」半纏
(明治時代、岐阜市歴史博物館蔵)

その後、明治27年（1894）に「消防組規則」が公布され、消防組織設立に関する諸規定が初めて全国に示されました。第13条には、「消防組ニ関スル費用ハ其ノ市町村又ハ町村組合ノ負担トス」とあり、こうして設立された消防組織は、「公設消防」などと呼ばれています。岐阜市でも、「公設消防」として「岐阜消防組」が設置されました。また、この頃には、龍吐水より放水能力に勝る腕用ポンプが岐阜市でも導入

され、消防のあり方も、「破壊消防」から放水による消火へと次第に転換していきました。

●警防団の時代～戦時下岐阜の消防～

昭和14年（1939）、「警防団令」の公布によって、それまでの消防組は解散し、新たに警防団が誕生します。警防団は、戦時下の地域社会において、消防だけでなく、防空や警備など様々な役割を担いました。



腕用ポンプ（牛牧村警防団）
(昭和15年（1940）2月新調、瑞穂市蔵)

●消防本部と消防団～現代岐阜の消防～

戦後、昭和22年（1947）の「消防組織法」の公布を受けて、翌23年に岐阜市でも消防本部が設立されました。加えて、消防団20団が設置され、現代消防の基礎が形作られていきます。

近年の岐阜市では、瑞穂市・山県市・本巣市・北方町の消防事務を受託し、4市1町による消防広域化を通して、消防体制の強化を図っています。本展では、ここで掲げた消防用具や文献のほか、100点以上の展示資料から、岐阜の消防史をひも解きます。



まとい 纏（柳津）
(昭和32年（1957）、岐阜市歴史博物館蔵)

研究ノート

かせき 柴田佳石と 岐阜公園の銅像

大塚 清史

岐阜市歴史博物館が立地する岐阜公園は、岐阜市のシンボルである金華山と長良川に隣接し、豊かな自然と歴史に彩られた総合公園である。本園は現在、岐阜市が「信長公の鼓動が聞こえる歴史公園」をコンセプトに本格的な歴史公園を目指して再整備を進めており、博物館の位置する公園南西部のエリアは「近代歴史ゾーン」として、明治26年開館の萬松館や、同40年建築の名和記念昆虫館、大正8年建築の名和昆虫博物館など、既存建物を活かした修景整備を予定している。

一方、当エリア内には建造物以外にも、明治15年公園内中教院で演説後に遭難した板垣退助の像（昭和25年再建）や、昭和11年当地を会場に岐阜市が開催した躍進日本大博覧会で設置した噴水塔（平和塔）の女神像（昭和24年再建）がある。これらは岐阜の近代史を語るモニュメントであり、作者はいずれも彫塑家の柴田佳石であるが、近年その業績が顧みられることがなかった。

この人物について、友人として板垣像再建の際、地元政財界との調整に当たった元岐阜新聞編集局長で俳人としても知られる木下青嶂（1898-1971）は、佳石を「此木周岩」の仮名で「此木氏は北村西望の高弟であって、現在国展の無鑑査、岐阜県には昔から因縁が深く、噴水女神像、御霊神社のコマイヌ、川瀬省三翁像等の作者である」と紹介している。¹「噴水女神像」（右図）は、昭和11年の設置後同18年金属供出で台座を残して失われた女神像、「御霊神社のコマイヌ」は当時美濃御霊神社と称していた岐阜護国神社に岐阜市が同16年に寄進し、現存する石造狛犬。「川瀬省三翁像」は県議、

衆議院議員を務め治水事業に尽力した山田省三郎翁像の誤り²で、同4年有志により岐阜公園内に設置した後、同18年金属回収で台座を残して消失、代わりに銅像を型取りしたコンクリート製胸像を台座上に設置し、同32年市内四ツ屋公園に移転し現存する。その他にも同2年金華尋常高等小学校（現 岐阜小学校）内に設置された関谷校長先生寿像（昭和18年金属供出で消失。台座は「考える人の像」に転用され現存）や、岐阜県庁前に同31年設置した元岐阜県知事、衆議院議員の武藤嘉門翁像が佳石の作と知られている。このように、岐阜市内における佳石作品の集積は全国に例をみないが、残念ながらその理由を青嶂は詳らかにしていない。

柴田佳石は『東京紳士録 上巻』（1953）等によれば明治24年8月20日、東京本所区小泉町で元宇和島藩士簡野成章の四男福四郎として出生した。³長男松太郎（1882-1945）は医学博士で陸軍一等軍医を務めた後、簡野病院を開業。漢文学者で辞典『字源』の編集者として名高い簡野道明（1865-1938）は遠縁に当たる。⁴幼少の頃より彫刻に興味を持ち、慶應普通部⁵、東京美術学校彫刻撰科を卒業後北村西望に師事して研鑽を積んだ。昭和8年頃より柴田姓を名乗るようになるが、青嶂は佳石が柴田家の養子であると記している。また、同時期から住所を愛知県名古屋とする文献が散見されるため転居したようであり、同17年頃に再び東京へ戻り下谷区中清水町に居を定めた。青嶂はその住いについて「南北の長さが町内と町内とに亘る大きな古い屋敷を買って、裏に彫塑家に恰好な高いしゃれたアトリエを作り、平素女中が二人もいて、我々には近づき難い豪荘な生活をしていた。」⁶と述懐している。

この昭和初期から戦中にかけて、佳石は多くの作品を手掛けていた。先述の関谷校長先生寿像をはじめ、同3年には岐阜県池田町に農村問題の運動家坪井秀の銅像を制作し「我国調刻界の新人東京簡野佳石氏」と紹介されている。⁷同8年には第14回帝展で「若い女」が入選、第15回帝展で「裸婦像」が再入選し、同10年には

1 木下青嶂「銅像再建記（二）」（岐阜文化会発行『生活と文化』昭和26年5月号所収）

2 現在残る台座に「彫刻 東京 簡野佳石」の銘が刻まれており、『宝暦治水薩摩藩士乃事績』（1932）「山田省三郎翁略伝」で簡野佳石制作と記す。

3 『日本美術年鑑』では明治33年生とするが、「GACMA 東京美術学校在籍者一覧」で簡野福四郎は明治43年入学、

翌年度まで在籍であり、入学年齢から勘考すれば24年生が正しい。

4 その縁により、佳石は簡野道明胸像（1941）、簡野信衛胸像（1966）を制作している。（簡野学園 HP）

5 交詢社内の福澤諭吉胸像（1953）、及び翌年慶応義塾大学内設置の同範胸像は、同校出身者である佳石の作品として最も良く知られている一つである。

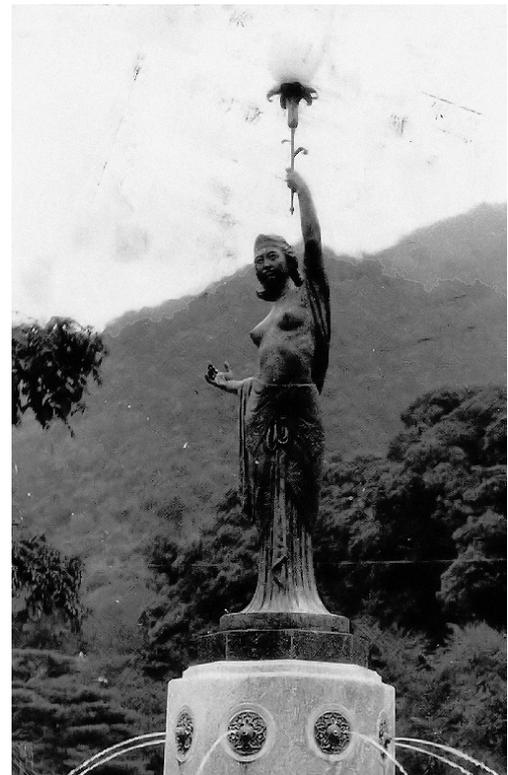
東邦彫塑院の創立に参加している。同11年文展では「おどり」、同12年第1回新文展で「闘いの前」、第2回新文展で「レスラー」、第3回新文展で「防火」と入選を重ね、同15年紀元二千六百年奉祝美術展に「健」を出品、同17年第5回新文展では無鑑査で「壮者」、同19年文部省戦時特別美術展で「戦士」をそれぞれ出品した。このように佳石は官展を中心に活躍した彫塑家であり、その作風は師の北村西望の薫陶を受け、健康的な身体表現による典型的な再現的写実主義⁸によるものであった。左手にトーチを高々と掲げた岐阜公園の逞しい初代女神像はその好例であり、それがまた「躍進日本」を具現化した博覧会モニュメントとして成功し、博覧会終了後も岐阜公園のランドマークとなっていた。

戦後、金属供出で失われた噴水の女神像は、「平和塔」と名を改め、岐阜市土木部の依頼により佳石が再度女神像を制作したが、その佇まいは前作と打って変わり幸福や美を司る浄瑠璃寺の吉祥天立像を髣髴とさせるものとなっている。また、同じく供出で失われた板垣退助像は、台座を板垣の襲われた中教院跡地へ移転の上、あたかも暴漢に「板垣死すとも自由は死せず」と叫ぶがごとき身ごなしの像を制作した。福澤諭吉胸像をはじめとする綿密な取材に基づく精気に満ちた胸像作品も多く、佳石の作風はこのようなモニュメンタルな像に対し、生涯にわたって如何なく発揮されてきたといえる。

一方、美術界では同26年日本陶彫会創立時の会員に名を連ね、第7回日展招待出品者となり、翌年9月には東京丸善画廊にて柴田佳石彫塑個展を開催した。⁹ 晩年は日展会員として「珂赤」の号を用い静謐で内相的な作風の小品の制作を続け、同43年10月17日77歳で死去している。

柴田佳石は、同時代に活躍し官展の三羽鳥と呼ばれた北村西望（1884-1987）、朝倉文夫（1883-1964）、建畠大夢（1880-1942）の盛名に隠れ、戦後は浮世絵版元の高見澤木版社の社長に就任し浮世絵界の再建と興隆を自らの使命とする一方、活計もあり銅像、胸像制作に注力

したためか、¹⁰ 没後その名は忘れられてしまった。しかしながら、その実力は概観した通り単なる銅像制作者でないことは明らかである。奇しくも岐阜公園には北村西望作の「安土錦秋」（1985：歴史博物館内。同館開館記念）、「若き日の織田信長」（1988：正門前。岐阜市制100年記念）の2作品がその後設置され、師弟の作品が会する場ともなっている。これらの銅像は岐阜市と当公園の歴史を語るとともに、芸術作品として今一度評価されるべきものではなからうか。



女神像（1936年、写真：岐阜市歴史博物館蔵）

〔参考文献〕

- 東京毎夕新聞社編『昭和之日本』1929
 辻寛一著『議員宿舎』1950
 鷺見礼司著『金華小百話』1975
 東京文化財研究所編『昭和期美術展覧会出品目録』2006
 東京国立近代美術館他2館企画・監修『日本彫刻の近代』2007
 田中修二編『近代日本彫刻集成 第三巻』2013
 岐阜護国神社編『岐阜護国神社ご創建八十周年』2020

6 木下青嶂「銅像再建記（一）」（岐阜文化会発行『生活と文化』昭和26年4月号所収）
 7 織田正隆『本郷村池田村人物誌』（1934）
 8 裸婦像（1931）など、新興芸術を取り入れた作品も僅かではあるが残している。
 9 丸善との結びつきは強く、昭和20年代前半名古屋選出の衆議院議員辻寛一が主唱した名古屋ゆかりの文化人の会に

丸善社長、会長を務めた司忠等と共に参加しているほか、同社社屋新築記念品のアテナ像（1952）等を制作している。
 10 青嶂は「あの羽振りのよかった此木氏は戦後は実際に金に困っていたとみえ」と記し、板垣退助像再建では着手金が当初支払われなかったため銅の購入に佳石が窮したこと、元来物事や金銭に対して神経質な性格で、それが災いしていたことを述べている。

歴博セレクション

海を渡った漆器 —南蛮漆器の世界—

2024.6.8(土)~7.15(月・祝)

戦国時代の終わりから江戸時代のはじめにかけて、それまでの日本の伝統的な漆器とは異なる製品が大量に作られました。それは、ヨーロッパ人の好むデザインを取り入れたきらびやかなもので、輸出用に作られたものでした。これを「南蛮漆器」と呼んでいます。



花鳥時絵螺鈿聖龕 (桃山時代、岐阜市歴史博物館蔵)

16世紀半ば、ポルトガル人が種子島に漂着し、日本とヨーロッパ（南蛮）との直接の交流が始まると、ヨーロッパからはキリスト教をはじめ日本人が初めて目にする文物が東南アジアを経由した貿易によって持ち込まれ、人々を驚かせました。一方で、日本を訪れたヨーロッパ人を虜にした日本の製品がありました。それが、漆器です。黒い漆に金粉で模様を描く時絵で装飾を施した漆器はほかの国に例がなく、そのつややかな黒と金の美しさについての称賛の声は当時日本に滞在したキリスト教の宣教師の記録にも残っています。宣教師が作らせた漆塗りの宗教用具はヨーロッパでも人気を博しました。安土桃山時代の後半にはヨーロッパ向けの生活調度品が生産され、大量の製品が海外へ輸出さ

れるようになりました。また、日本国内向けでもヨーロッパ文化の影響を受けた異国趣味の製品が作られました。これらの漆器には、当時盛んに作られた高台寺時絵の技術に朝鮮の螺鈿の



花鳥時絵螺鈿洋櫃 (桃山時代、岐阜市歴史博物館蔵)

技術が新たに取り入れられ、それまでの伝統的な作風とは異なる意匠や技法を用いた独特な作品となっています。



草花蝶時絵螺鈿筆筒 (江戸時代、岐阜市歴史博物館蔵)

しかし、日本が鎖国を強化した17世紀中ごろ以降、交易の中心がオランダとなったことで製品の作風が変化します。和風の絵画を描いた作品が貿易の主流となり、南蛮漆器は姿を消していったのです。

こうした南蛮漆器が作られたのは安土桃山時代から江戸時代初期にかけての約50年間とごく限られた期間だけでしたが、日本・ヨーロッパの双方にとって東西文化交流の象徴でもありました。日本の歴史の中のわずかな時期をいろどった、国際色豊かな工芸品の世界をお楽しみください。

令和5年度受贈資料

令和5年度は、表記の皆様に貴重な資料をご寄贈賜りました。厚くお礼申し上げます。(敬称略)

大平 晋也	ダットサンロードスター 十二型 昭和八年式	1台	加藤 たみ子	岐阜提灯摺込用具 鶺鴒図 総絡み	一式
村瀬 務	中西郷村 村瀬家文書 朝焼 萬古焼 須恵器	44件 8件 1点 3点		岐阜提灯摺込用具 玉堂雑木鶺鴒	一式
嶋崎 達美	昔の道具のミニチュア	一式	松原 哲	足踏みミシン 実用小包紙 表札・水道検査票・ ガス検査票	1台 一式 一式
伏見 昌三	武者幟	一式	江崎 泰弘	ボードゲーム 拍子木	3点 1点
高橋 明利	則武村高橋家文書	一括	大森 武雄	加納鉄哉作「鬼の念仏像」	1点
山内 一英	日傘 (絹張・表皮付) 日傘 (紙張・網代) 絹傘紙	2点 2点 一式	箕浦 俊典	マッチ	16点
平光 光明	机上灯 電鈴	1点 1点	平光 勝弘	出格子 障子戸・ガラス戸・ふすま 岡持ち	一式 一式 4点
大木 伸彦	長良川ホテル写真 長良川ホテル絵はがき 中部読売新聞 昭和63年2 月22日 名鉄岐阜駅売店写真 仙石勘重肖像写真 長良川ホテル本館・営業休 止案内	6点 5点 1点 1点 1点 1点	神谷 啓子	足踏みミシン椅子 ベルト	1点 1点
			小野木 仁孝	長森尋常高等小学校「旅行の栞」 丸物百貨店包装紙 選挙肅正絵ばなし 山勝レコード包装紙 岐阜県河川変遷図 宗門送り一札之事 ほか近代資料一括	1冊 2点 1冊 1点 一式 1通 一括

本誌2、3ページ、5ページで紹介した以外の本館・分室展示は以下の通りです。

■本館 1階特別展示室■

○10月12日(土)～11月24日(日) 「清流の国ぎふ」文化祭2024関連特別展「つなぐ」

■本館 特集展示(2階総合展示室内)■

2階の総合展示室の一角に特集展示室を設置し、1～2か月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの展示日程は次のとおりです。

○8月3日(土)～9月16日(月・祝) 「ガリバン」

○9月21日(土)～11月17日(日) 「加藤栄三・東一記念美術館所蔵品展」

■分室 原三溪記念室の展示■

○7月17日(水)～8月25日(日) 三溪の書画～夏を楽しむ～

○8月27日(火)～10月14日(月・祝) 三溪が見た岐阜の風景

上記の日程は、都合により変更する場合がございます。ご了承ください。

分館が構造補強工事のため休館しました

加藤栄三・東一記念美術館（以下分館）は、土砂災害特別警戒区域内に立地していることから、このたびお客様の安全確保を図るために、構造補強工事を実施することとし、令和6年6月17日（月）から休館いたしました。休館前はたくさんのお客様にご来館いただき、誠にありがとうございます。令和7年度のオープンを目指して工事を進めており、開館にあたっては、選りすぐりの展覧会をご用意して、皆様をお迎えする予定です。ご不便をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます。

また、9月21日（土）～11月4日（月・祝）の間、本館2階特集展示室にて分館に収蔵している貴重な美術品を展示する予定です。休館中でも分館の魅力が詰まった美術品をご覧いただけるよい機会となります。普段分館に足を運んだことがない方も、この機会にぜひご観覧ください。

利用の御案内

■ 開館時間

午前9時～午後5時
（歴史博物館の入館は午後4時30分まで）

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ 休館日

毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始（12月28日～1月3日）
（月曜日が祝日の場合はその翌日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ 観覧料

高校生以上…310円（団体250円）
小中学生…150円（団体90円）

両館共通で観覧される場合

高校生以上…520円（団体410円）
小中学生…260円（団体150円）

※団体は20人以上

※特別展は、その都度料金を定めます。

※下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。（ミライロID可）

- ①岐阜市在住の70歳以上の方（特別展を除く）
- ②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1人
- ③家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族（高校生以上）の方（特別展を除く）

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

■ 交通案内

JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。

岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でお越しの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。

詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



〈原三溪記念室〉

岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分。

岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ。

博物館だより No.117 2024.7

編集・発行 岐阜市歴史博物館

（分館）加藤栄三・東一記念美術館

（分室）原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080